

立命館
大学総合情報
センターだより

新入生歓迎 特集号

CONTENTS

- 表紙 総合情報センター長挨拶
- 2~4 2003年、情報化がさらにすすみます!
- 5 先輩に聞く! ~RAINBOWはこんなに便利~
- 6 先輩に聞く! ~図書館活用のススメ~
- 7 先輩に聞く! ~データベース活用のススメ~
- 8~11 新入生にぜひ読んでほしいこの本 各学部の先生より
- 12 リンディスファーン福音書のご紹介
- 12 問い合わせ先一覧

新入生のみなさん、入学おめでとうございます。

受験勉強から開放され、これからの生活にいろいろ夢を描いておられることでしょう。また、大学での学習やクラブ活動についてもいろいろな期待を抱いておられると思います。本学の図書館や統合情報システム「RAINBOW」はその期待に充分お応えできるものです。

総合情報センターにおける図書館機能を担う施設には、衣笠キャンパスに図書館と修学館、びわこ・くさつキャンパスにメディアセンターとメディアライブラリーがあります。また立命館アジア太平洋大学にはAPUライブラリーがあります。蔵書冊数は3キャンパスをあわせれば230万冊にもなり、このほかに雑誌や新聞、また電子ジャーナルを含む多様な学術情報データベースを有しています。これらの学術情報は、インターネットを介して自宅や下宿からも文献の所在調査や情報検索、資料の入手ができます。

一方、学内には約4,200台のコンピュータがネットワークに接続されており、電子メールや電子掲示板、またインターネットを利用することができ、ネットワークを介して様々な情報収集や情報発信ができます。

今回の「総合情報センターだより」には、情報施設の活用法や先生からの推薦図書といった、新入生の皆さんへのウェルカムメッセージがたくさんつまっています。総合情報センターは、皆さんがこのような学術情報や情報システムを積極的に活用し、充実した学習生活を送られることを希望します。

立命館大学総合情報センター長 谷口 吉弘



2003年 キャンパスの 情報化 がさらに進みます!!

立命館総合情報システム「RAINBOW」の紹介

新入生のみなさん、入学おめでとうございます。

立命館大学では教育研究を支援するための情報基盤として、立命館総合情報システム「RAINBOW」(Ritsumeikan Academic Information Network Bridging Our World)を整備しています。

衣笠キャンパス、びわこ・くさつキャンパスには、学生の皆さんが授業や自習のために利用できるパソコンが約4,200台設置されています。

また、全キャンパスに無線LANを整備し、いずれも高速回線でRAINBOWに接続されています。

WWW、電子メール、コースツール、蔵書検索、データベース検索など、RAINBOWを利用して充実した大学生活を送りましょう。

RAINBOW GUIDEが案内人

RAINBOW施設や図書館施設などの総合情報センター施設を利用するための手引きとなるのが「RAINBOW GUIDE」です。大学生活を送る中でどのようにRAINBOWが活用できるか、どういった施設があるのか、などが書かれています。よく読んでRAINBOWを活用してください。



ホームページは最新情報が満載!

総合情報センターホームページでは衣笠図書館、メディアセンター、メディアライブラリーやRAINBOWに関するさらに詳しい情報や最新の情報を掲載しています。「RAINBOW GUIDE」には掲載されていない各種マニュアルや開室日程なども掲載されています。また、コンピュータウイルス情報やシステムメンテナンス情報などもお知らせしていますので、ぜひアクセスしてみてください。

総合情報センターホームページ

[「立命館大学トップページ」](#) [「在学生」](#) [「総合情報センター / 図書館」](#)



RAINBOWユーザーID通知書は大切に!

RAINBOWの情報機器や各種サービスを利用するためには、ユーザーIDとパスワードが必要です。立命館大学では全ての学生の皆さんに「RAINBOWユーザーID通知書」を情報処理の授業などで配布しています。ユーザーIDは電子メールアドレスも兼ねています。IDとパスワードは個人情報に関わるものですから、大切に管理してください。

全キャンパスで無線LANが利用できる

学内の全ての教室や学生の皆さんがよく利用するラウンジ、図書館などキャンパス内のさまざまなところに無線LANを整備しています。この無線LANは、キャンパス内で手軽にRAINBOWに接続できるので、自分のノートパソコンを携帯すれば、いろいろなところでブロードバンドに匹敵するスピードでRAINBOWに接続できます。もちろんインターネットを活用した授業参加が可能ですから、授業を受けながらさまざまな検索をすることもできます。

*ノートパソコンには簡単な接続設定と無線LAN機能が搭載されている必要があります。



無線LANなら、こんなことが・・・

- 文字通りワイヤレスでRAINBOWに接続
- 普通教室で授業を受けながらも調査・検索が可能
- コースツールを活用した授業参加ができる
- ラウンジで議論しながら利用できる
- オープンパソコンルームで並ばなくてもよい
- 高速接続で、しかも無料



全教室にプラズマディスプレイを整備し、マルチメディア化を実現

学内の全ての教室に大型プラズマディスプレイ（一部高輝度プロジェクタもしくはRGBモニター）を設置しました。これらの教室では、DVD・CD・VHSが再生できるほか、ノートパソコンを接続して画面を映し出せるなど、どの教室でも視覚的効果の高い視聴覚教材を活用することが可能となっており、まさにマルチメディアを活用した臨場感溢れる授業の展開が可能です。さらに、先にご紹介した無線LANを利用すれば、オンライン教材をはじめとしたWWWコンテンツを提示しながら授業をすることもできます。



- 大画面でしかも薄型
- 視野角が広い
- デジタルコンテンツ、マルチメディアコンテンツに対応

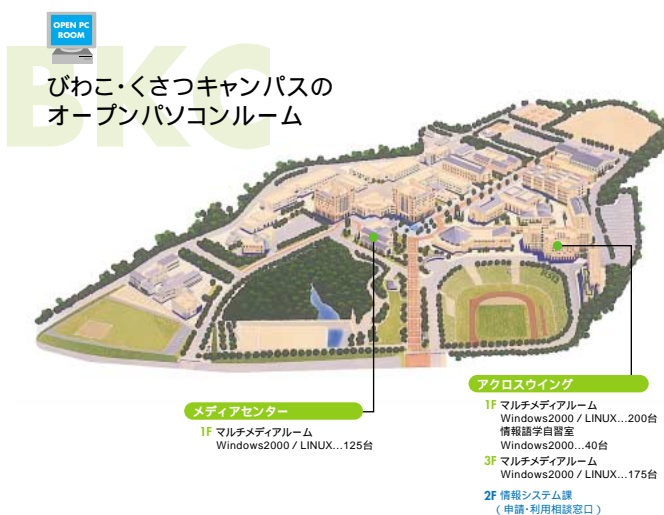


RAINBOW

立命館統合情報システム「RAINBOW」の紹介

自習環境として1,000台のパソコンを開放!大容量記憶メディアも利用できる!

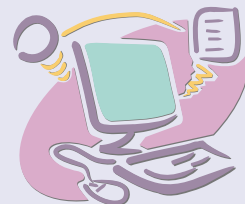
学内には、学生の皆さんが自由に利用できるオープンパソコンルーム(マルチメディアルーム)が7ヶ所あり、約1,000台のパソコンが設置されています。これらの施設は授業時間外の自習やレポート・論文作成や情報検索など、さまざまな目的で利用できます。また、全てのパソコンで大容量記憶メディアのCD-R/RWをはじめ、コンパクトフラッシュカードや各種PCメモリカードを利用することができ、フロッピーディスクには保存できない大容量のファイルをや取りすることもできます。その他にも、各キャンパスに情報語学自習室を整備していますので、ヘッドホンを利用した語学試験対策など語学自習が可能です。



ウイルス検知ソフトをはじめとしたソフトウェアの配布

立命館大学は、日本ネットワークアソシエツ株式会社のウイルス検知ソフト「McAfeeVirusScan」のサイトライセンスを取得しています。立命館大学に所属している学生・職員・教員は、この製品を利用することが可能です。近年、ネットワークを介してコンピュータウイルスが蔓延しています。コンピュータウイルスは自分のパソコンに影響を及ぼすだけでなく、他人にも迷惑をかける可能性があります。普段皆さんが使用している自分のパソコンには、必ずウイルス検知ソフトをインストールしてください。その他にも、配布できるソフトウェアが多数あります。尚、これらの配布ソフトウェアは、オープンパソコンルームなどでRAINBOWホームページからダウンロードできるほか、情報システム課窓口にて未使用のCD-Rディスクと交換しています。

先輩に聞く!



RAINBOWはこんなに便利

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。RAINBOWスタッフの池尻です。
RAINBOWスタッフとは、オープンパソコンルームに常駐していてパソコンの利用相談を受けるスタッフで赤いユニフォームを着ています。
今回、スタッフの私が新入生のみなさんに「とても便利なRAINBOWの使い方」をお伝えしようと思います。

立命館大学では、みなさんが授業や課外活動の中で、パソコン利用ができるようRAINBOWという情報機器・施設を整えています。両キャンパスには7ヶ所のオープンパソコンルームがあり、自由にパソコンを使うことができます。メールの読み書き、WEBブラウジングだけでなく、ゼミ発表の資料やホームページ作成などいろいろな使い方があります。

たとえば...

私は文学部の人文総合科学インスティテュート・人間と表現コースを専攻しています。4月には、一年間の講義を登録する期間があります。このときに役立つのがオンラインシラバスです。このオンラインシラバスは、インターネットで公開されているので、受講登録の際はシラバスを参考にしながら、パソコンを利用して決めています。

また、講義が始まると、インターネット上に公開されているコースツールを利用して、受講している講義のレジュメをダウンロードしたり、講義ごとに設置されている掲示板に書き込みをしたり、さらには課題をメールで提出したりしますので、パソコンとインターネット環境は学生生活に欠かせません。

私の所属する専攻分野では芸術・文化系の講義が多くあるのですが、講義に出席するだけでなく、実際のフィールドワークが求められています。

私はRAINBOWのメールに芸術系情報のメールマガジンが届くように登録しているので、美術館の展覧会情報をいつも簡単に得ることができ、その情報をもとに展覧会に足を運ぶことで、授業の予習・復習、そして感性を磨くことにも役立っていると思います。

さらに!!

この4月からは全キャンパスで無線LANを使える環境になり、自分のノートパソコンで教室の他、ラウンジや図書館など学内のさまざまな場所で、まさに、いつでもどこでもRAINBOWに接続することができるのです。また、自宅や下宿に帰ってからも自分のパソコンからRAINBOWにアクセスしてWEBメールなどを見ることができます。

それだけなの??

オープンパソコンルームはマルチメディアに対応していますので、芸術・文化系講義でも役立ちます。写真や画像といった大きなデータをCD-ROMに保存したり、デジタルカメラで撮影したデータをパソコン上で加工したりすることもできます。さらにソフトウェアも充実していますので、いろいろな講義にあわせて、CG製作やプログラミング、統計処理などの高度な作業も学内ですることができます。もちろんプリンターやスキャナーもあります。



このように立命館大学では、みなさんが情報のスキルを身につけていくために十分な施設・設備を整えています。たくさんの情報を活用し、大学生活をさらに効率よく充実したものにしてくださいね。私たちRAINBOWスタッフもそんな皆さんのお手伝いをしたいと思っています。

立命館大学文学部人文総合科学
インスティテュート3回生
池尻 七恵



文学部哲学科教育人間学専攻3年生
永田 知子さんにお話をお伺いしました。

Q. 教育人間学専攻では、どのようなことを学んでいるのですか？

私の所属している教育人間学専攻は、2001年からスタートした、比較的新しい専攻です。ここでは、真の「心の教育」とは何か、そして「人間形成」「臨床教育」「心理健康」という3つの分野を中心に学んでおり、スクールカウンセラーになるための授業もあります。

高校時代とは違い全員が決められた授業を受けるのではなく、自分で受ける科目を決められるため、興味のある分野や自分のやりたいことが勉強でき、とてもやりがいがあります。自分の知りたいことを深く学べるのも、大学のいいところだと思います。

Q. 図書館をどのように活用していますか？

発表する機会やレポートを書く課題が多いので、テスト期間だけではなく、1週間に2、3回は図書館に来て勉強しています。本だけでなく、新聞や雑誌もよく使いますね。パソコンを利用して論文や新聞記事を調べることもあります。特に朝日新聞や日本経済新聞は、オープンパソコンルームのパソコンからも、全文読むことができるのでとても便利です。

マルチメディアルームで、授業の空き時間にビデオを鑑賞したり、語学用CD-ROMで勉強したりすることもあります。また、ゼミの仲間とグループワークをするときには、グループ閲覧室を活用します。テレビやビデオデッキといった機材がそろっていますし、自分のパソコンを持ち込んで、資料をテレビ画面に映し出しながら討論することもできます。

また、RUNNERSというデータベースを使えば、立命館大学と立命館アジア太平洋大学でどんな本や雑誌があるのかを、自宅からでも調べることができます。他のキャンパスにある本でも、RUNNERSを通して気軽に取り寄せることができますので、私もよく利用していますね。

Q. 永田さんは、「ライブラリースタッフ」だとお伺いしましたが、ライブラリースタッフとはいったいどのようなことをしているのですか？

私は、もともと図書館や本に興味があったので、ライブラリースタッフになりました。利用統計の作成や、図書館ガイダンスの講師補助、図書館に所蔵している古い資料の電子化など、最初にイメージしていた「図書館の仕事」よりも、もっと高度な仕事をしていると思っています。

また、ライブラリースタッフになったことにより、「図書館のエキスパート」に少し近づけた気もしています。

Q. 最後に、新入生にメッセージを。

大学の図書館は、高校の図書室と比べると規模がとても大きいです。本の冊数も多いですし、視聴覚機材やパソコン、データベースがそろっています。「今まで図書館には来たことがないなあ」「図書館に行っても何をしたいのかわからない」-そんな苦手意識をもたないで、まず来てみてください。

立命館大学にせっかく入学したのだから、図書館もめいっぱい活用してください。そして何か図書館のことで分からないことがあったら、私たちライブラリースタッフに気軽に声をかけてくださいね。

どうもありがとうございました。



データベース活用のススメ

経済学部
ヒューマン・エコノミーコース3年生

吉田 学 さん

新入生の皆さんご入学おめでとうございます。

大学での授業・学習において、図書資料を始め、各種データベースや情報システムを活用する事はとても重要です。それには、図書館に蓄積されている資料や設備をうまく利用していかなければなりません。

立命館大学では、コンピュータを使って様々な情報を入手することが出来ます。その方法の一つとして、「コア・データベース」があります。コア・データベースは16種類のデータベースで構成され、目的や用途に合わせて、様々な情報を簡単に取り出すことが出来ます。

新入生のみなさんにとって、「使える!」データベースをいくつかご紹介しましょう。



新聞記事もパソコンから!

「1年前にこんな記事が新聞に載っていたはずなんだけどなあ」「ODAについての新聞記事をできるだけたくさん読みたいなあ」

そんなときには、「日経テレコン21」や、「朝日新聞DNA」を使ってみましょう。「日経テレコン21」では、日本経済新聞4紙が、「朝日新聞DNA」では、朝日新聞とAERAの記事検索をすることができます。調べたいことを検索ボックスに入力して検索すると、キーワードに関連した記事の見出し一覧が表示されます。「日経テレコン21」では新聞記事検索機能に加えて、「国民総生産」や「産業統計」等の各種数値・統計データ約180種類が提供されています。

デスクトップ・ディクショナリー

WEBブラウジングをしているとき、雑誌や新聞を読んでいるとき、言葉の意味について迷ってしまう事や、ある事柄についてより深く調べたいということがあると思います。そんなときは「Japan Knowledge」がとても便利です。百科事典や各種辞書、ビジネス情報源(現代用語の基礎知識)などを横断的に検索することができます。

テーマやキーワードから本を見つけよう

私は医療と経済の関わりについて研究するゼミに所属しています。ゼミのテーマに関連する本はまず「RUNNERS」で探します。読みたい本の貸出状況や学内のどの図書館に所蔵されているかがすぐに分かりとても便利です。貸出中の本の「予約」や、離れたキャンパスにある本の「取り寄せ」も出来ます。より広い範囲で検索したい場合には、「和書コンテンツデータベース」で探します。このデータベースでは、本の内容や目次、本の「おび」等の情報から自分の必要な本を探し出すことができます。さらに、対象となる本の詳細情報を表示して「蔵書検索」をクリックすると、貸出状況や学内のどの図書館に所蔵されているかがわかります。これは、「RUNNERS」の機能を利用している訳で、このように2つのデータベースを組み合わせることで、多彩な検索機能が実現されており、また利用者が意識する事なく、複数のデータベースを利用出来る様に工夫されている点も、コア・データベースならではの、と言えるでしょう。

コア・データベースを使いこなそう

コア・データベースには、それぞれにヘルプ機能がついています。「使い方がわからない」「使いこなすのが難しそう」と思っている人でも簡単に、目的の情報を探し出すことが出来ます。

ご紹介した以外にもコア・データベースには様々な種類のデータベースがあります。一度図書館に足を運んで、実際にコア・データベースを使ってみる事をお勧めします。使っていく内に検索のコツなどが分かってきて、情報を得ることが楽しくなってくると思います。



新入生に読んでほしい！この本

法学部教授 中谷 義和

法学部

構想力を求めて

21世紀世界は、不安定な状況のなかで新しい秩序を模索しています。それだけに新鮮で確かな構想力が求められています。

高校生のときに、受験準備期に読んでみたいと思った著書は多かったはず。入学したいま、その機会が訪れたわけですから、まず、その本を手にしてみましょう。

読書の意味や読み方がわからないという新入生もいることでしょう。いわゆる読書論は多いのですが、加藤周一『読書術』(岩波書店、1962年)を薦めます。また、読むという点では、私の趣味ということもありますが、「新書」を、領域を問わず読んでみることです。トピックから専門的領域まで多様な新書が出ています。

状況が混沌としていると歴史書が読まれるといわれます。それは歴史のなかに現代を読み、将来を展望したいと思うからでしょう。推薦書となると枚挙にいとまはありませんが、興味を覚えたことのある歴史的事象や諸国の歴史を現代の眼においてたどってみてください。この点とかかわって、私の友人(トロント大学教授)から、カナダ外交官で日本政治(思想)史研究者のノーマン伝の映画化が進められると知らされましたが、彼の『クリオの顔』(岩波文庫、『ハーバート・ノーマン全集』所収)の一読を薦めます。

政治学サイドからしますと、やはり、『丸山真男集』を挙げなければなりません。この著作集のなかの論文や評論には、時代を超えて迫真力を覚えるはず。一度、著者の知的迫力に触れてみてください。

本学の教学理念ともかかわりますが、『きけわたつみのこえ』(岩波文庫)に指目してください。これは、新入生とほぼ同時代の戦没学生の手記ですが、天を突く慟哭と地を射らんばかりの苦悩が聞こえてくるはず。

グローバル化状況にあるといわれていますが、これにアプローチするためのひとつとして、D・ヘルドの訳書を挙げておきます～『グローバル化とは何か』(法律文化社、2002年)、『デモクラシーと世界秩序』(NTT出版、2002年)～。また、アメリカの世界政治が注目されていますが、斎藤眞『アメリカとは何か』(平凡社)と山内昌之『イスラムとアメリカ』(中央公論新社)が示唆的です。

「読む」と「読み取る」とには、それなりに苦勞が求められますが、さあ、ともに学びましょう。

経済学部教授 井澤 裕司

経済学部

本を読むという楽しみ

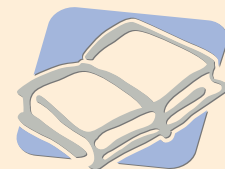
新入生に勧める1冊の本、というのは随分酷な課題だということは引き受けてから気がついた。ビートルズやモーツァルトから1曲を選ぶのさえないに近い。まして職業柄書物に埋もれて暮らしているのだから、1冊の本など挙げえるわけもない。やむなく仕事から離れた領域で、自分が何度も繰り返し読んだ本を思い出し、読んだ回数を無理やり数えてみるとトップ当選は中助助『銀の匙』とロバート・キャパ『ちょっとピンぼけ』になる気がする。ちょうど新入生に向いている。1冊にこだわり取ってどちらかを選ぶのなら『銀の匙』かもしれない。なんとなく今の私はそれを勧めたい気分である。

別にそれを読んで何かを得られるわけでもない。ワクワクするようなストーリー展開があるわけでもない。ただ自分を育ててくれた伯母との思い出を軸に子供時代の出来事を綴っただけの小説だが、本を読むという行為自体に価値と楽しみがあることを思い出させてくれる。

舞台背景や言葉づかいは確かに古い。けれども文体の瑞々しさや印象の鮮やかさは読み手に至福の時間を与えてくれる。「これはもう二十年も昔の話である」という最後の文章に出会うころには、読者は改めて20年も前の体験をかくも新鮮に描きることができる作者の感性と文学的才能に驚嘆することになるだろう。「変わらないことが新しい」という言葉も思い出されるかもしれない。

さて幸いにも本書によってもっと本を読んでみたいという気分になれたなら、できるだけ長編に挑むのがよいと思う。大学の4年間はあっという間に過ぎてしまう。社会に出たらもう長編を読んでいる余裕は無い。長編を味わえるのは人生の中でも今しかない、と覚悟を決めた方がよい。

本当は本を読むだけではなくワグナーのニーベルングの指輪などを全編じっくり聴きこむのもよいのだが、是非図書館にもDVDを置いてもらいたい。たとえば野上彌生子の『迷路』などはどうだろうか。実を言えば、ヒロインの万里子は架空の人物に私が恋心を抱いた唯一の女性でもある。多くの人と恋人を共有できるというもまた読書の楽しみとは言えないだろうか？



家永三郎『戦争責任』(岩波書店、1985年7月)

家永三郎氏が、国が氏の執筆した歴史教科書の記述について書き換えをせまったことをめぐって、国と裁判であらそったことは多くの
人々に知られている。この著名な歴史家は、教科書検定に光をあて、歴史の真実を国が故意にねじまげることを厳しく批判をした。

第2次世界大戦以前の日本が、帝国として、植民地をもち、侵略戦争をおこない、非人道的な残虐行為をおこない、アジアの人民に多大の被害を与えた。それらの人類に対する大きな過ちを直接に実行したり、あるいは命令したりした人間に責任が発生するのは当然である。家永氏は、そればかりでなく、直接にかかわっていなかった様々な分野、様々なレベルの人々も含めて、過去の戦争で日本人がおこなった行為に対する責任を論理的に追及している。

小泉首相が、靖国神社に参拝することに何故アジアの人々は厳しい批判をするのであろうか。それは、日本は第2次世界大戦でおかした過ちをきちんと明らかにせず、責任を曖昧にしたまま、長い年月をすごして来たからである。最大の責任者であった天皇は、何の責任もとらず、在位を全うした。また、元A級戦犯を総理大臣に選出したという事実があるからである。アジアの国民がA級戦犯を合祀した首相の靖国神社参拝を容認できないのはあたりまえである。

それでは過去の戦争時に生まれていない学生諸君には、戦争責任はないのであろうか。家永氏は同書のなかで、そうではないことを明確にしている。「世代を異にしているけれども、日本人としての連続性で生きている以上自分に先行する世代の同胞の行為から生じた責任が自動的に相続される。」

「国家・民族に所属する一員として世界人類社会に生きているかぎり、国家・民族が集団として担う責任を分担する義務を免れないのは当然である」

と指摘しているのである。国際化が叫ばれる中、学生諸君もまた大きな国際舞台で活躍することになるであろう。そのとき、私たちは、家永氏のこの言葉を重く受け止めなければならない。

いなければならないことをいう勇氣

豊かな市民社会や民主主義的な社会を築いていくためにジャーナリズムの果たす役割は大きい。しかし、視聴率競争や部数競争など過剰な競争によって引き起こされる人権侵害や本来果たすべき役割を果たしていないのではないかと、人々のマスコミに対する不信任は増大している。

鎌田慧『反骨のジャーナリスト』(岩波新書、2002年)は、日本の近現代で強権に屈することなく言論の力で権力に戦いを挑んだジャーナリストたちを描くことで、現在のジャーナリズムのあり方を問いかける。本書に登場するのは、陸羯南(くがかつなん)、横山源之助、平塚らいてう、大杉栄、宮武外骨、桐生悠々、尾崎秀美、鈴木東民、むのたけじ、斎藤茂男といった人たちで、彼らに共通するのは「いわねばならぬことをいひ続けた」ことにある。著者はジャーナリズムを「人間の自由と人権を拡幅する削岩機」であり、言論の自由は「民主主義的権利の拡大のためにこそある」と強調する。

すぐれたジャーナリストは、いま起こりつつある事件が歴史の中でどういう意味を確定的に持つかを予測し、同時代を捉えることにある。そのためにも歴史的経過の中で現在を捉えることが重要になる。

吉野源三郎『職業としての編集者』(岩波新書、1989年)は、出版という行為(編集者の仕事)が社会の中でいかにに関わり、どんな役割を果たしうのかを自身の回想という形をとりながら論じたものだ。出版(パブリケーション)は公共(パブリック)と深く関わっている。岩波新書や『世界』がどのような哲学によって出版されてきたのかを知ることができる。本書はまた、編集者として同時代をいかに捉えたかといった歴史哲学的考察でもある。

こうした先人たちがどのように生きたかを知ることで、後に続くものとしての私たちは時代に迎合しない勇氣を学ぶことができる。

ぜひ 新入生に読んでほしい！この本

渡辺淳一著:遠き落日 (上)(下) 角川書店(角川文庫)1982年、集英社1990年

この本は、貧困と障害にもめげずに医学に志してその名を世界にとどかせ、最後はアフリカで黄熱病の犠牲となった野口英世の劇的な生涯の物語である。野口英世という名前を聞くと子どもの頃、絵本やまんがで読んだ偉人伝を思い出す。よく言われるように、偉人伝というものは主人公の過去がすべて美化されるので、読み物として子供時代に人生の生き方を学習するには興味深いのが、大人になってからは退屈なものとして殆んど手にする事はなかった。しかし、この本は立身出生や親孝行のモデルとして語られた偉人野口英世の「虚飾の偶像」に対して、血の通った人間・野口の赤裸々な青春と苦闘の生涯や学問への情熱を、丹念な取材と可能な限りの資料をもとに見事なまでに描ききって新しい生命力あふれる野口像を作り出し、読むものに熱い感動をあたえてくれる。

今回この本を新入生に推薦する理由には、つぎの三点がある。

今日世界の中で最も豊かな国のひとつになったわが国では、子どもや若者が自分の目標に向かって一生懸命に努力することに対して、何か恥ずかしいかっこ悪いというように考える風潮があるが、明治の貧しい時代に障害への差別に対する反発とぎらぎらしたハングリー精神で幾多の苦難を突破して行った野口の行き方は、今日の我々に忘れられている、人間が生きていくための強さを教えてくれる。

アメリカに留学し世界で活躍する野口から、日本人が異文化や他者の中でどのように生活し、かつ自己のアイデンティティを確立していくかを示している。

情報化時代といわれる今日において、われわれは作られたイメージやインターネットを通してのバーチャル(仮想現実)な情報でものごとを判断しがちであるが、現実の厳しい、醜い、激しい、面白い、そしてすばらしい世界への関心や理解こそ、若くて柔らかい感性を持った新入生に必要なものであると考え、この二冊(上下)を推薦します。

ロジェ・カイヨフ著(多田道太郎・塚崎幹夫訳)『遊びと人間』講談社学術文庫、1990年

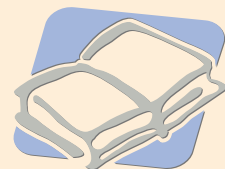
受験勉強を経て大学に入学されたばかりの皆さんは、「遊び」と「勉強」や「仕事」は対極にあるものと思いこんでいないだろうか。しかし、受験も出世競争もどこかゲームに近い側面を持っており、エデュテインメント(楽しみながら学ぶという意)などという難しい造語を持ち出すまでもなく、その両者には深く通底する原理がある。

「遊び」について深く考察した古典として名高い本書は大きく2部構成になっている。第1部では「遊び」についての6つの基本的定義と4つの基本的分類(競争、偶然、模擬、めまい)を基軸に、「遊び」の由来、特性、原動力、社会性などについて明晰な整理と思索を展開する。つづく第2部は、「遊び」の4分類における2つの要素を組み合わせた合計6つの組み合わせについての考察から出発する。カイヨフによれば、古代の社会(神話的社会)は仮面による「模擬とめまい」の組み合わせによって超越世界を顕現させたのであり、それを「競争と偶然」の組み合わせの制度化によって乗り越えたのが近代ということになる。「偶然=運」はくじやギャンブルを通じて「競争」の行き過ぎにバランスをとるためにあるという理解だ。

現代は、テレビゲームを始めとするエンタテインメントが深く生活の一部となり、遊び心のない商品やサービスは競争に勝ち抜くことが難しくなっている。モノやサービスそのものではなく、それらを通じて与えられる深い感動や喜びが、それらの価値の大きな構成要素になりつつあるのだ。

現代は、もう一度カイヨフの原点を学び、その続きを理論化していくことを必要としているように感じる。

さらに、カイヨフをより深く学んで行く学生諸君は、その思索の背景になっている社会進化論的な文明理解の是非や、遊びの文化的側面の研究について本書の先輩にあたるホイジンガの『ホモ・ルーテンス』との対比など、興味深い研究テーマをいくつも発見することができるだろう。社会学を専攻する学生だけでなく、広く人文社会科学を学ぼうとする諸君に是非一読を勧めたいと思う。



松浦友久『漢詩 美の在りか』(岩波新書、2002年1月)

イギリスの文庫本といってもいい「ペンギン・ブックス」に漢詩の翻訳書が幾つも入っています。漢詩は中国の古典であると共に世界の文学です。そして日本人の古典でもあります。「春眠 曉を覚えず」の句(孟浩然「春暁」)は誰もが聞いたことがあるでしょう。井伏鱒二の名訳「ハナニアラシノ外ヘモアルソ 『サヨナラ』ダケガ人生ダ」(于武陵「酒を勤む」)を愛唱する人も多い。

古来より現在に至るまで、なぜ漢詩は人々を魅了して止まないのか、その生命力を解き明かしてくれたのが本書です。著者は漢詩の魅力と生命力には五つの「美の在りか」があるとして、まず「詩人とその詩境」「主題とそのイメージ」「詩型とその個性」の三章で、「作者=だれが」「主題=何を」「様式=いかに」という文芸全般に相關連する三つの重要要素について解説しています。詩人では「田園の隠者」陶淵明・「永遠の旅人」李白・「誠実・真摯な詩家」杜甫・“適”に生きた「白居易、主題では「友情」「戦乱」「懐古」「飲酒」がとりあげられています。第四章「詩歌(歌枕)の旅」は名勝古跡と密着した漢詩の制作についての説明です。第三章「詩型とその個性」と第五章「『文語自由詩』としての訓読漢詩」は、各詩型の差異を拍節リズムの構造から説明し、漢詩が「二音一拍」の「詩的リズム単位」をそなえ、これに「休音(句末に「拍の流れは有りながら、音の流れが無い」という現象)が加わるといふ卓説を展開し、日・中詩歌の比較、訓読漢詩の意義に及んでいます。

著者は漢詩には「癒しとしての美」があるといっています。中国の古典詩に興味を持つ人はもちろんのこと、ひろく詩歌に心を寄せる人に読んでもらいたい一冊です。

『中谷宇吉郎随筆集』(樋口敬二編、岩波書店)

丁度、10年前の頃だったと記憶するが、本学理工学部のBKC拡充移転直前のことである。小生は長年住み慣れた京都から新キャンパス近接地に転居し、半年程、そこから衣笠キャンパスまで車で通勤していた。そんなある日の通勤途中のこと、カー・ラジオから流れるNHKの朗読番組を何気なく聴いていた。何やら陶器でできた茶碗の形や曲線の特徴を色々な立場から論じた著作の朗読で、アナウンサーであろうか、静かで且つ語尾の明確な朗読が流れていた。論点は、茶碗の形や曲線には地域や時代によって特徴的な違いがあり、これを数値的に計測したり表現する方法を探求する点にあった。

その中に「茶碗の曲線はどの部分をとりてもその局部は円の一部分で表現でき、その半径が異なるだけである。しかし、厄介なのはこの半径がなかなか決め難いことである。観察の倍率を変えると円の一部に見えたものがまた別の円の一部に見えるからである。したがって、茶碗の形や曲線を正確に分析しようとするで無限に正確で複雑な計測をしなければならない。」という趣旨の著述があった。当時、小生は「フラクタル幾何学の材料科学への応用」に関する研究を手掛けていた矢先であり、B. B. Mandelbrotの「The Fractal Geometry of Nature」を繰返し読んでいた折も折、カー・ラジオの朗読にやおら引きずり込まれることになった訳である。

ここまで書くと上記朗読の著作物が何であったかを想起する諸君もいるかと思うが、それは「中谷宇吉郎随筆集」(樋口敬二編、岩波書店)の中の「茶碗の曲線」という短編であり、このことを小生は番組の最後尾の紹介で始めて知った。早速、生協書籍部で探したが見つからなかったので、京都市内の大手書店に出掛けてこの書を発見したときの喜びは、今でもハッキリと覚えている。まず、最初に「茶碗の曲線」を精読した。素晴らしい著作に改めて感動した。そして、本書に著されたすべての短編を限なく精読した。斜めに読もうとしても無意識の内に精読したくなるような随筆集であり、著者の世界観に感動し、ひれ伏す思いに駆られたことを懐かしく思い出す。本書の著者が北海道大学教授時代に世界的評価の高い「雪」に関する多くの研究実績を残されたことは、広く知られていることと思うが、自然界の森羅万象にこれ程まで広く深く洞察をめぐらせた先人は少ないのではないかと、改めて尊敬の念を禁じえない。

理工系の学生だけでなく、文社系の学生諸君も学生時代に是非とも一読されることをお勧めします。

リンディスファーン福音書(ファクシミリ版)のご紹介



本学貴重書コレクションに新しく加わった、イギリス中世写本の至宝「リンディスファーン福音書」をご紹介します。

「リンディスファーン福音書」は7世紀終わりごろ、イングランド北部東岸沖に浮かぶリンディスファーン島(現在の呼称はホーリー・アイランド)の修道院で、ケルト人修道士によって制作された、「装飾写本」のひとつです。

当時のキリスト教修道院文化と芸術の何たるかを、羊皮紙に施された精緻なケルト文様やその高度な写本の技術で現代に伝えており、世界史上最も重要な「写本」の一つといえるでしょう。

(参考資料)『装飾の神話学』鶴岡真弓(NDC:757/TS 86・衣笠図書館)

2003年度より、衣笠図書館・メディアセンター・メディアライブラリーは、これまでの月末作業日を閉館します

図書館では、様々な作業のために毎月一度月末作業日を定めて休館していましたが、2003年4月より、開講中の月末作業日については、終日開館といたします。どうぞご利用ください。

各館の開館スケジュールについては、ホームページを参照してください。

<http://www.ritsumei.ac.jp/www-lib/>



??困ったときには?? 問い合わせ先一覧

キャンパスネットワーク利用全般についてのお問い合わせ

RAINBOW全体の運用管理は総合情報センター情報システム課が行っています。

情報システム課の窓口

場所：衣笠キャンパス(有心館1階)
BKC(アクロスウィング2階)

日時：平日の9:00~21:00

内容：RAINBOW関連申請受付、各マニュアルの配布、
RAINBOWスタッフによる利用相談、
パスワードの再発行

図書館の利用に関してのお問い合わせ

衣笠図書館

電話番号 075-465-8217
メールアドレス library@st.ritsumei.ac.jp

修学館リサーチライブラリー

電話番号 075-465-8248
メールアドレス shugaku@st.ritsumei.ac.jp

人文系文献資料室

電話番号 075-465-8189
メールアドレス bunken@st.ritsumei.ac.jp

メディアセンター

電話番号 077-561-2634
メールアドレス media@st.ritsumei.ac.jp

メディアライブラリー

電話番号 077-561-3943
メールアドレス medialib@st.ritsumei.ac.jp